

▼沿道を駆け抜けるランナーとサポートする町内スタッフ

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

北海道

奥尻町

おくしりちょう

奥尻町の概要

奥尻町は、北海道の南西端に位置し、東西11km、南北27kmの南北に長い台形状の「奥尻島」全域に人口約2,700人の住民が暮らす離島の町です。その昔、アイヌ語で「イクシユン・シリ」と呼ばれ、後に「イクシリ」と訛ったものが「オクシリ」となりました。イクは「向こ

北海道南西沖地震の
発生と観光業

平成5年7月12日午後10時17分、マグニチュード7.8の北海道南西沖地震が発生しました。地震発生後2〜3分で押し寄せた最大で約30mという大津波や火災によって、島内だけで死者・行方不明

う、シリは「島」、つまり北海道本土から見た「向ここの島」という意味が通説とされています。

奥尻島は、島の面積の7割以上が山林で占められ、この山林の大半がブナの原生林で覆われています。ブナの山は保水力が高く、水の豊富な島として北海道内の離島で唯一稲作を営めるとともに、涸れることのない清流が複雑な海岸線に流れることで、奥尻島を代表する味覚でもあるウニやアワビといった海の幸の宝庫となっています。

北と南の離島が連携した
スポーツイベントによる島興し

▶ 沖縄県伊平屋村と「ムーンライトマラソン協定」を締結（左：奥尻町長）



者合わせて198名、被害総額664億円という甚大な被害を受けました。人口4千人強、町の年間予算規模が約50億円という当時の島にとっては大惨事となりました。

その後、全国から寄せられた温かいご支援、ご協力によって、島民一丸となって復興へ向け立ち上がり、震災後わずか5年を経過せず、平成10年3月には完全

復興を宣言することができました。

復興宣言後、島の基幹産業である観光業は、震災前の観光入込客数5万9千人に迫るほどまで回復しましたが、震災から10年後の平成15年度をピークに、ここ3年間は、当該入込ピーク時の半数を下回る2万6千人台で推移しています。

沖縄県伊平屋島との出会い

北海道南西沖地震の被災から20年という節目の年を迎え、新たな島の未来の礎となるスポーツイベントの開催を検討していたところ、沖縄県伊平屋村で開催されている、月夜に走るという全国でも類を見ないマラソン大会「伊平屋ムーンライトマラソン」の存在を知りました。

伊平屋ムーンライトマラソンは、夕方スタートをし、しばらく明るい中で田園風景や海岸の景色を堪能して走りまです。やがて島の西海岸に沈む美しい夕日を眺めながら駆け抜け、日が暮れた後は、東海岸から昇る満月の光とペンライトの明かりを頼りに、ランナーが思い思いのペースでゴールを目指します。

また、大会前日に行われる前夜祭、大会終了後の後夜祭では、モズクそばや牛汁、地酒の泡盛を使ったカクテルが振る

▶ 奥尻町（上）と伊平屋村（下）の大会の様子



◀地元小学生によるよさこいの披露で盛り上がる会場（前夜祭）



舞われるほか、郷土芸能の披露やアトラクションなど、島全体でのおもてなしを存分に満喫できるマラソン大会です。

この伊平屋島が20年間かけて育て上げた「ムーンライトマラソン」ブランドと運営ノウハウをご提供いただくため、町と観光協会が中心となって伊平屋村と業務提携に向けて交渉を重ねた結果、ムーンライトマラソン大会の開催を通じて、観光振興の拡大と離島である両島相互の交流を積極的に行い、観光基盤の強化を

図ることを目的とした「ムーンライトマラソン協定」を締結することで合意に至りました。

こうして、北の「奥尻島」と南の「伊平屋島」が離島タッグを組み、新たな広域連携のスタートラインに立ったのです。

奥尻ムーンライトマラソン

伊平屋村と協定を結んだ本町では、平成26年6月13日に前夜祭、14日に第1回マラソン大会と後夜祭を開催する運びとなりました。地震から20年の節目という



▶大会のレース風景

点で多くの道内マスコミから取材を受け、報道されました。また、離島連携という形で暖簾分けを受けた初めての大会という珍しさもあって、定員500名を超える申込があり、その6割以上の参加者が奥尻に初めて来島するなど、新たな観光客層の開拓といった点でも、まずは一定の効果があつたものと手応えを感じました。

大会コースは、島外から来島される参加ランナーの交通アクセスも考慮して、前夜祭会場とスタート地点を島の東海岸中央部に設定しました。まずは、フェリーターミナルを有する奥尻地区の東海岸沿いを北上した後、折り返し地点を南下し、ゴールと後夜祭会場でもある島の最南端の青苗地区へ向かいます。

運営スタッフは、観光協会や役場職員が中心となり、島内建設業者には会場設営、町内有志にはエイドステーションの給水サポートにご協力いただきました。また、ムーンライトマラソンのもう1つの目玉である前夜祭・後夜祭において

は、漁協や商工会女性部によるウニ鍋、アワビ焼きなど郷土料理の振る舞い、全国初の純離島産ワインとして知られる「奥尻ワイン」のドリンクサービス、さらに地元小学生のよさこい演舞披露など、島全体で歓迎の気持ちを伝える取組となりました。

日没前後の時間帯を走るコース中盤以降は、民家や街灯のない海岸沿いの道路がおよそ5km続きます。ここで、奥尻独自の仕掛けとして、地元漁師にもご協力いただき、イカ釣り漁船の漁火を演出として加えました。夜空の月灯りと沖の漁

◀海上のイカ釣り船からは漁火と声援も



▶暗やみの中無事ゴールするランナーたち

◀ ウニ鍋をはじめとする郷土料理で
おもてなし（後夜祭）



火に照らされながら、奥尻島の大自然と潮風を身体いっぱい感じて走るユニーク性が、参加いただいたランナーからも非常に好評で、大会後アンケートでもおよそ9割という高い満足度が得られています。

今後の課題と展望

―伊平屋と奥尻の相互交流―

おかげさまで、一昨年（第3回）、昨年（第4回）とも約3割の方にリ

ピーターとして来島いただき、中には伊平屋（例年開催10月）と奥尻（同6月）両方の大会に毎回出場されるコアなファンランナーもいらっしゃるようになりました。10月の沖縄が野営できるほど温暖で、伊平屋島では数百名のランナーがキャンプ場で夜を明かす一方、北海道の6月はまだ肌寒さが残り、島内宿泊施設の収容数を考慮すると、現行定員の500名が相応な受入数となっています。しかし今後、参加ランナーのさらなる拡大が見込まれば、宿泊対策として廃校舎や公民



◀ 島外からの参加者を歓迎

◀ あたたかいお見送りに別れを惜しむ参加者



館など公的施設の活用や民泊の検討も1つの方法と考えられます。

ところで近年、スポーツツーリズムの定着もあって、マラソンだけ見ても、今や全国各地で数多の大会がひしめく中、ようやく定着しつつある奥尻ムーンスライトマラソンを維持・発展させていくためには、前述のリピーターに代表される優良顧客に「また来てみたい」と思ってもらえる工夫が必要だと思っています。

マラソンに限らず、当町の観光全体に関わることで、奥尻ならではの魅力

創造、すなわち「奥尻島らしさ」の磨き上げと発信は最重要課題の1つです。とは言え、限られた人材と資金の中で、奥尻町単体での取組にも限界はありますが、「ムーンスライトマラソン協定」という出発点に立ち返ると、伊平屋島との関係にもヒントが隠されている気がします。

今年すぐには難しくても、両島が協力して知恵を出し合えば、北と南それぞれの大会の長所を引き出せるような取組、お互いの欠点を補い合えるような仕組みづくりが生まれるかもしれません。両島が今後さらに相互交流を深め、より深い信頼関係を築き上げることで、一度参加いただいたランナーを惹き付けてやまないコラボレーションを実現できれば、それこそが「協定」の基本的な考え方であり、まさに国の推進する地方創生の横連携モデルに他ならないのではないでしようか。

本島がこの先10年、20年と、伊平屋島と切磋琢磨しながら、「向こうの島」を訪れる多くのランナーで賑わうことを信じ、「来年も走りに来たい」と思っていただけの大会づくりに努めてまいります。

奥尻ムーンスライトマラソン大会長

奥尻町長 新村 卓実

（平成29年2月20日付第2991号）

▼鹿狼山頂からみる初日の出

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

新たなまちづくりへの取組

福島県

新地町

しんちまち



新地町の概要

新地町は、福島県の太平洋側最北部に位置し、東西南北とも約7km、周囲24kmのほぼ四辺形を成し、総面積は46・53km²、中心部は海拔平均20～30mとなっています。

交通は、JR常磐線が平成28年12月に再開をし、道路は東京から水戸市・いわき

市を経て岩沼市に至る国道6号と常磐自動車道が本町を縦断し、新地ICが開設されています。また、相馬市を経て国道115号で県都福島市へ、国道113号で宮城、山形方面へ至ります。自動車で相馬市へ10分(9km)、県都福島市までは80分(65km)、東北の中枢都市仙台市へは60分(54km)の距離に位置します。

海、里、山、田園と多様な自然環境を有しており、豊富な産物にも恵まれています。海洋性気候により、東北地方の中では比較的温暖な地域であり、降雪も少ないことから、四季を通じて住みよい気候に恵まれた新地町は、旧石器時代の遺跡をはじめ、縄文時代の「新地貝塚」や「三貫地貝塚」などがあり、原始時代から多くの人々の歩みが刻まれています。

また、近世の戦国時代には伊達氏と相馬氏の政争の地となり、伊達政宗によって駒ヶ嶺、新地の両城が攻略され、以後伊達領となって明治維新を迎えました。

震災直後のJR新地駅



平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、千年に一度という地震と大津波をもたらし、かけがえのない多くの生命と美しいふるさとが失われました。町の

未曾有の大震災

そして、明治22年の町村制施行によって、福田・新地・駒ヶ嶺の3カ村が誕生し、昭和29年には、3カ村が合併し新たに新地村が誕生、昭和46年に町制を施行しました。

震災からの復興の現状

総面積46・53km²の約5分の1にあたる9・04km²が津波で浸水し、そのうち農地は、本町の農地の約40%にあたる約4・2km²が被害を受け、また家屋については、全半壊630戸の被害がありました。さらに福島第一原子力発電所事故では比較的放射線量の影響を受けない当町でも農業や漁業、観光などへの風評被害が未だに残っている状況です。

東日本大震災という未曾有の困難に直面しましたが、「やっぱり新地がいいね」を基本理念に掲げ、新地町復興計画に基づき、復旧・復興に向け取り組んでまいりました。これまで国、県、自治体からの職員の派遣支援等多くの支援を得ながら被災地でも復興まちづくりのトップランナーと評価をいただいているところです。

第一次復興計画では住宅を失った津波被災者の高台移転による「すまい再建事業」を最優先課題として取り組み、震災からのいち早い復旧・復興事業を進め、第二次復興計画では、「すまいの再建」に加え「コミュニティ・絆」や「仕事・なりわい」の復興と「新たなまちの拠点づくり」をめざして復興を加速させたことに

より、昨年末には「すまいの再建」が概ね完成し、津波で被災された住民が移転した居住地で新たな生活をスタートさせています。

また、交通インフラにおいても常磐自動車道・新地ICの開通や東北中央自動車道・相馬福島道路の一部開通、そして、震災の津波により流出したJR常磐線・新地駅と周辺の線路は内陸に移設し、新たな新地の顔として新駅舎とともに運転再開となりました。

平成28年4月からは第5次新地町総合計画後期基本計画に復興計画を統合し、

JR常磐線運転再開記念式典



JR常磐線運転再開 電車を見送る地域住民



新たなまちの拠点づくり

新地駅周辺地区は、JR常磐線新地駅を中心に、国道6号や主要地方道相馬百理線バイパスなど交通アクセスに恵まれ、さらに町役場や保健センター、図書館などの公共施設が集積する地区にも隣接しています。

平成32年の町の将来人口を概ね8,700人(※)と目標を定め、各施策を行っています。

(※)平成27年国勢調査人口は8,218人

このため、駅周辺の23.7haを新たなまちの拠点地区として位置づけ、平成25年から新地駅周辺市街地復興整備事業に取り組んでいます。現在は、造成は概ね終わりを迎え、消防・防災センターや災害町営住宅の整備が完了し、住宅やクリニックの建築が始まっています。

本年度は、「新たなまちの拠点づくり」に注力し、主な事業として、町民が気軽に立ち寄れる「複合交流センター」、子どもから大人まで楽しめるフットサルを中心とした「屋内型スポーツ施設」、新たな事業者や起業家の支援と駅前の賑わい創出を図るための「複合型商業施設」、交流人口の拡大が期待される「温浴・宿泊施



▶ 駅前パース図

設」を整備していきます。

また、この地区ではスマートコミュニティを導入します。具体的には、平成30年操業を目指し相馬港4号ふ頭に建設しているLNG（液化天然ガス）基地からパイプラインを通して供給されるLNGを活用するため発電施設「地域エネルギーセンター」を整備し、この施設で造られる電気に加え、発電で生じる温熱、熱交換器で発生させる冷熱を各施設に安定して供給するほか、今後整備が予定されるスマートアグリにはCO₂も供給し、環境負荷の少ないエネルギーシステム導入の先進地を目指します。

海・里・山の魅力回復と賑わいづくり

本町の玄関口となる新地駅周辺の事業とともに、町が賑わうための方策として観光・交流人口の拡大と移住・定住を促進していく必要があると考えています。

本町は、町の概要でも前述したとおり、比較的小さな町域ながら豊かな自然を背景に海や里、山に触れ、体感することのできる資源があります。

まず本町のシンボルでもある山、標高429.9mの鹿狼山かろうざんです。山頂から3

▶ 40,000本もの色鮮やかなチューリップが咲き誇る「チューリップ祭り」



60度の眺望が見事で、四季を通じてハイキングなどが楽しめる山です。5つの登山コースが整備され、所要時間も40分から1時間程で登ることができ、子どもから大人まで楽しむことができます。毎年、地域住民を中心とした実行委員会が主催する「鹿狼山元旦登山」が恒例となっており、本年は「日本一早い山開き」として実施したところ、町内外から約3,500人の登山者があり、山頂より初日の出を迎えております。

里では、毎年4月中下旬には約40品種、4万本もの色鮮やかなチューリップが咲き誇る「チューリップ祭り」や右近清水の菅ノ沢溜池（約3ha）を取り囲むようにソメイヨシノ、河津桜や珍しいウコン桜などの様々な種類の桜が咲き誇る「桜の回廊」、そして秋には里山の紅葉をみることが出来ます。

最後に海です。残念ながら、東日本大震災により被災し、まだ復旧途上にあることや風評被害などにより、まだ交流ができる環境が十分に整っていると言える



▶ 多くの観光客が訪れた海辺のイベント「遊海しんち」

◀若者たちの活気がみなぎる
「やるしかねえべ祭」



状況ではありませんが、震災前には、海釣り公園や釣師浜海水浴場など多くの人で賑わっていました。海釣り公園では、相馬共同火力発電（株）新地発電所の温排水により、様々な魚種が集まる釣り場として人気があり、大きいもので74cmのヒラメが釣れた時もあることから、県内外から釣果をもとめて多くの方に来場いただきました。釣師浜海水浴場では、シーズン中に訪れる海水浴客は言うまでもなく、毎年8月上旬には釣師浜海水浴場や漁港を会場とした海に関連するイベント

ント「遊海しんち」が開催され、夜には花火の打ち上げがあり、多くの集客がありました。そのイベントは、震災後の夏、町に元を取り戻そうと新地町商工会青年部主催で「なんだかんた言ったってやるしかねえべ祭」としてよみがえり、震災以降沈んでいた町の空気も、子どもたちの歓声、大人たちの笑顔によって活気が戻り始めました。今では、新地町商工会青年部が主体となった実行委員会で運営する「やるしかねえべ祭」として定着し、回を重ねるごとに来場者が増え、昨年開催された第6回では、過去最多の36,000人の来場者がありました。この祭りもそうですが、震災以降は、若者たちが自分たちの手でまちづくりを行うという意識や活動がより高まったように感じます。

移住・定住の取組

移住・定住の促進については、都会からのU・I・ターンなどの方を受け入れるオープンな地域づくりや、若者世代が安心して結婚・出産・子育てができるよう、保健や医療、子育てに対する支援の充実を図り、定住促進住宅の建設などで、若者世帯を中心に、移住・定住に繋がるよ

うな取組を推進しています。

特に教育の充実を図っており、未来の新たな教育のカタチとして全国に先駆け、ICT活用教育に取り組んでいます。現在、小・中学校の授業では、各教室に整備された電子黒板や一人一人に配付されているタブレットを使用し進めているほか、テレビ会議システムにより国内外とつながる交流授業、他校との意見の共有など各校それぞれ工夫をした授業が行われており、子どもたちの将来を見据えた教育を町全体で行っています。



▶ ICT活用教育
(タブレットを利用した授業)

▶ ICT活用教育（テレビ会議システムによる他校との交流授業）



おわりに

震災から7年目を迎えましたが、復興はまだ道半ばです。町のめざす将来像「信頼の輪が広がる暮らしきらめくしんち」の実現のため、東日本震災による「ピンチ」を「しんち」の新しいまちづくりの「チャンス」と捉え前向きに取り組んでいきます。

新地町長

(平成29年8月28日付第3011号)

▼棚倉城跡

福島県

棚倉町

たなぐらまち

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

地域資源を活かした地方創生



棚倉町の概要

棚倉町は、福島県中通りの南部に位置する城下町です。

町内を南北に国道118号線、東西に289号線が走り、面積は東西に19km、南北に17・4km、159・93kmあり、人口は、約15、000人の町です。また、栃木県、茨城県に接



▶花咲く街(まち) 赤館城跡より望む町の風景



する本町は、気候も関東地方に似ており、一年を通して積雪の少ない、住みやすいまちです。
面積の約7割を森林が占める本町は、茨城県を経て、太平洋に注ぐ「久慈川」の源流域で、八溝山をはじめ、

豊かな自然が残ります。環境省の重要里地里山500選にも名を連ね、春は、桜、新緑が町内を彩ります。農業も盛んで、米、イチゴ、ブルーベリーなど、季節ごとに美味しい農産物が採れます。

棚倉町の歴史は古く、1万年以上前の生活を今に伝える遺跡が残り、江戸時代には城下町として栄えました。

平安時代の史跡では、東北地方では珍しい山林寺院跡「流廃寺跡」が発見されています。平成26年3月に、国指定史跡となった流廃寺跡からは、全国でも珍しい、金銀の装飾（象嵌）を施した鉄剣が出土し、話題となりました。

戦国時代には、伊達氏、佐竹氏、白川結城氏が勢力を競い合ったこの地域には、山城の赤館城跡が残ります。

江戸時代には、「棚倉藩」として、立花宗茂公を初代藩主に、9家17代の藩主がこの地を治めました。2代藩主丹羽長重公が築いた「棚倉城」は、戊辰戦争で焼失しましたが、現在も町の中心部に堀や土塁の城跡が残り、桜、紅葉の名所として親しまれています。

東北の小京都 棚倉

明治の廃藩置県、昭和30年の1町3ヶ村の合併を経て、現在の棚倉町となりました。

多くの文化財、史跡が残る本町では、昨年10月、全国の自治体等で構成する全国京都会議に加入し、東北の小京都としてPRしています。

本町には、棚倉城跡、赤館城跡のほかにも、歴史ある寺社仏閣が残ります。

特に、神社については、格式の高い



都々古別三社の1つ、八槻都々古別神社

神社である一ノ宮が町内に二社あり、馬場都々古別神社（陸奥一ノ宮）、八槻都々古別神社（奥州一ノ宮）は、文化財としても注目されています。馬場都々古別神社は、平成26年10月、本殿が国の重要文化財に指定されました。馬場都々古別神社の本殿は東北地方では珍しい、桃山期の建築を今に伝えます。八槻都々古別神社には、鎌倉時代から伝わる「御田植祭」が継承されており、国重要無形民俗文化財に指定されています。

また、寺院には、弘法大師が東北行脚の途中に護摩壇を築き、八溝山系



御田植祭

▲秋色の馬場都々古別神社



に住む悪鬼を調伏祈願したと言われる山本不動尊があり、春は山桜やシャクナゲ、秋は紅葉の名所となっています。

このほかにも、寺社仏閣、城下町らしい街並み、茶の文化に欠かせない「お菓子」屋が残る街並みは風情があり、散策するのも面白いです。

歴史資源を観光産業に

緩やかに人口減少が続く本町では、



講座」も開催しています。

二つ目として、ふるさと検定の実施とふるさとガイドの育成です。ふるさと検定には、「棚倉ふるさと講座」を受講した方だけでなく、町内外から多くの方に受験していただいております。ふるさと検定の1級の合格者の皆さんには、ふるさとガイドとして、祭りなどのイベント開催時に、観光客の方へ町の見どころを伝えていただいています。

三つ目の取組として、全国京都会議への加入です。現在、町では、新しく観光施設を作るのではなく、街並み、寺社仏閣、史跡、伝統、文化等の「古」からある歴史資源を活用し、町の観光の活性化に取り組んでいます。

リゾートスポーツプラザ ルネサンス棚倉

平成2年にオープンした、「リゾートスポーツプラザ ルネサンス棚倉」は、30面のテニスコートやプール、ジム、乗馬等のスポーツ設備、温泉、会議室、宴会場などを備えたリゾート型多目的宿泊施設です。

これまで学生合宿や事業所の研修



など団体の方を中心に利用いただいていたことが、平成23年の東日本大震災に伴う、東京電力福島第1原発の事故による風評被害により、来客数が大幅に落ち込んでいます。

放射能への不安はまだ払しょくされておらず、一度離れてしまったお客様に戻って来てもらうことは並大抵のことではなく、事故以前に比べて来客数が4割程度しか回復していない状況が続いています。しかし、実際にお越しいただいたお客様には、

ここ「棚倉」が安心であることを理解していただいています。今後も引き続き地道な活動を積み重ねていきたいと考えています。

この様な状況の中で、平成27年度より地方創生関連事業で、地域資源であるルネサンス棚倉を核としたヘルスツーリズムとヘルスケア産業の創出に取り組んでいます。

棚倉町の地方創生

本町では、昨年4月に、国の地方創生人材支援制度を活用して、福島大学の准教授を地方創生アドバイザーに任命しました。地方創生アドバイザーには、「棚倉町まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定に向けた助言をいただくとともに、町民一人ひとりが主体的に健康づくりに取り組み、生涯を通し快適で充実した暮らしができる「健康自治のまちづくり」の中核を担っていただいています。

地方創生アドバイザーをきっかけに、産学官の連携を強化していくことを目的に福島大学と相互友好協定を締結し、地域産業の振興や健康づくり、教育といった分野での連携を

豊富な歴史資源を活かした観光産業を活性化させる取組を行い、交流人口の拡大を図っています。

一つ目として、「棚倉ふるさと講座」の実施です。住民の方に町の魅力や歴史を知ってもらい、棚倉町を好きになってもらうとともに、町外からの観光客の方への「おもてなし」の気持ちを醸成することを目的に、講習会やフィールドワークを開催し、多くの町民の方に参加いただいております。また、平成27年度からは、小学生を対象とした「子どもガイド育成

進めています。

また、昨年10月に策定した「棚倉町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中では、高齢者の健康づくりを重点的に推進し、元気な高齢者を育成し、高齢者が活躍できる地域づくりを進めることとしています。

健康づくり事業を通して、健康関連事業に関わる人材を育成し、さらには、ヘルスケア産業の創出やヘルスツーリズムへつなげていく戦略を打ち出しています。

① 地方創生にむけた健康づくり事業

本町ではこれまで、町内の商店街で利用が出来るポイントカードの「たなちゃんポイント」を活用し、健康づくり事業や健診事業を受診した際にポイントを付与しています。また、住民と協働で健康づくり等の事業を行っていくために、高齢者サポーターや認知症サポーターを養成してきました。

今回の地方創生関連事業でも、高齢者が生涯活躍できる地域をつくるため、「認知症機能低下予防」について、大々的に取り組んでいます。

一例を挙げますと、ルネサンス棚倉を利用した「いきいき健康脳活教室

室」を実施しています。この教室には多くの高齢者の方々に参加いただき、参加者の方の認知機能の改善の効果がみられています。

また、この教室を今後、自立的に運営し、ヘルスケア分野での雇用や産業の創出に結びつけていくことを目的として、サポーターやトレーナーの養成に取り組んでいきたいと考えています。特に、サポーターについては、昨年度から「いきいき脳活サポーター養成講座」を開催し、145名のサポーターを養成しています。



いきいき健康脳活教室

ヘルスツーリズムの様子



今後は、健康づくり事業でサポーターの方が主体的に活躍できる環境づくりを行い、住民との協働による健康自治のまちを構築していきます。

② ルネサンス棚倉を核としたヘルスツーリズム事業

本町では、地域の活性化とルネサンス棚倉の再興を目的に、昨年度からヘルスツーリズム事業に取り組んでいます。

具体的には、ルネサンス棚倉を利用し、健康関連企業と連携して最良の「健康」、「食」、「睡眠」を提供する

もので、脳と体のアンチエイジングを目的としたヘルスツーリズムのプログラムを構築し、ツアーを実施しています。今後アンチエイジングだけでなく、認知機能低下予防や生活習慣病改善のプログラムを追加し、「ヘルスツーリズム」を町の成長産業の一つに位置付け、育成を図っていきます。

終わりに

本格的な地方創生への取り組みは、平成27年度から始まったばかりです。歴史資源を活かした観光事業やヘルスツーリズムにより交流人口を増やすとともに、今後は二地域居住や定住事業に取組み、町の人口減少の抑制に向けた戦略を進めていく予定です。

最後に、町では、自立と協働によるまちづくりを行っています。地方創生においても、地域住民とともに協働による地域づくりを推進し、地方創生の実現に向けて各種施策に取り組んでいきます。

棚倉町長 湯座 一平

(平成28年5月23日付第2960号)

▼杉戸宿開宿 400 年への思いを風船に込めて (第 1 回杉戸宿場まつり)

埼玉県

杉戸町

すぎとまち

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産 (世界・日本)

開宿400年、今と昔がつながる時

日光街道杉戸宿開宿400年プロジェクト

杉戸町の概要

杉戸町は埼玉県東部に位置し、首都圏40km圏内にありながら、自然と都市が調和した田園都市であり、人口46,064人、世帯数18,689戸(平成28年4月1日現在)と県内で最も人口の多い町です。



東西に10km、南北に7km、面積30.03km²で、東側は江戸川を隔てて千葉県に、南は春日部市に、西は大落古利根川を隔てて宮代町と久喜市に、北は幸手市にそれぞれ境を接しています。

杉戸町には、江戸時代五街道のひとつである日光街道の江戸から数えて5番目の宿場として、「杉戸宿」が設置されました。当時の杉戸宿には、大名などの有力者が泊まる本陣や脇本陣、一般庶民も泊まる旅籠などが建ち並び、荷物の運搬等のための「問屋場」も置かれていました。現在でも日光街道沿いには当時の面影を残す蔵や建物が残り、県内外から宿場を巡る観光客も多く訪れます。

開宿400年を契機としたプロジェクト

杉戸宿は、江戸幕府により1616年

▲杉戸宿開宿400年プロジェクト会議の様子



に日光街道に設置され、2016年(平成28年)に、開宿400年を迎えました。杉戸町・杉戸町観光協会・杉戸町商工会は、開宿400年を契機に、杉戸町の原点を再確認し、交流人口の増加、観光客誘致による中心市街地の商業活性化、郷土の歴史に対する町民の理解と誇りの醸成、並びに杉戸町らしさの確立と魅力発信のための施策「杉戸宿開宿400年プロジェクト」を進めています。

これまでの取組と内容

(1) 杉戸を紹介する冊子の作成

杉戸宿を活用した取組は、平成25年度から始まっており、平成25年には、住民参加型の「杉戸宿魅力再発見ワークショップ」を実施し、「日光街道杉戸宿宿場めぐりマップ」を作成しました。また、ワークショップでのご意見の中に「日光街道沿いに案内看板や道しるべを設置してはどうか」という提案があり、案内看板のデザインや設置位置、パンフレット類作成のための資源調査などを行いました。

「杉戸宿開宿400年プロジェクト」の推進体制は、町内の商工業関係者、教育機関、住民団体、交通機関等により構成された「杉戸宿開宿400年プロジェクト会議」、さらに、プロジェクト会議で決定された各種事業を行う作業部会として「にぎわい部会」、「古民家再生・活用部会」、「プロモーション推進部会」、「食資源開発部会」があり、それぞれが連携しながら事業を進めています。

平成26年には総合案内板を2か所設置。さらに、現存する史跡等の詳細を記載した「杉戸宿まち歩きガイドブック」を作成しました。平成28年には町内のみどころや、グルメを紹介する「るるぶ杉戸」を発行し、また、今後見込まれる外国人観光客向けの英語版・中国語版のまち歩きガイドブックの発行、ガイドブックに合わせた道標及び高札(観光案内板)を整備するなど、ハード・ソフト両面から観光客増加を目的として作成しました。

(2) 「杉戸宿案内人の会」の発足と杉戸宿めぐりの開始

「杉戸宿の歴史を多くの人に知ってもらい、杉戸の魅力を再発見してほしい」という考えから、平成25年度杉戸宿観光案内ボランティアガイド養成講座を開催し、認定試験に合格した10名によって「杉戸宿案内人の会」が発足しました。

杉戸宿案内人の会は、平成26年4月より町の観光資源である「杉戸宿」を案内する「杉戸宿めぐり」(事前申し込み必要)を開催し、現在では、14名(平成28年4月1日現在)がこの杉戸宿案内人として、活動しています。



▲杉戸宿めぐり

て、活動しています。

参加者数は開始した平成26年度では398名でありましたが、平成27年度には640名と増加しており、町外からの参加者が約7割を占めています。

(3) 杉戸宿新グルメの創出

杉戸宿を活用した取組が、町の商業活性化につながるよう、「杉戸宿のブランドینگ」を進めるプロジェクトも始めました。

その一つとして平成26年11月には、杉戸町の歴史や食文化をテーマに、新たな「杉戸宿グルメ」の創出を目的とし、町内の食品関係業者によって構成される「食資源開発部会」が発足しました。部会では江戸時代、本陣などで振る舞われたと古文書に記載があった「たまごふわわ」（※現在静岡県袋井市が商標登録をしているため、杉戸町では「たまふわ」と表現する。）や、昔から杉戸でよく食べられていた「八つ頭」を埼玉県が品種改



▶たまふわ杉農カレーうどん

良し、開発した「丸系八つ頭」に着目し、美食プロデューサー小松美貴子氏監修のもと、試作開発や試食会を行いました。また、この「たまふわ」をテーマに、埼玉県立杉戸農業高校食品流通科の生徒に協力していただき、「たまふわ」の創作料理の研究開発を行い、町内事業者への試食会や、アドバイスなどを行いながら商品化を目指しました。

これらの取組の結果として、平成27年9月に「まちの駅・道の駅アグリパークゆめすぎと」にて「金ゴマ入りたまふわミルクセーキ」、平成28年1月に「杉戸天然温泉 雅楽の湯」にて「たまふわ杉農カレーうどん」、同3月に「アトリエル・ミュゲ」にて「ふわとろたまふわプリン」、「たまふわクリームシフォン」の商



▶金ゴマ入りたまふわミルクセーキ

たまふわ
クリームシフォン▶



◀ふわとろ
たまふわプリン

品化が実現しました。今後も、杉戸宿新グルメの取組は継続して進めていきます。

(4)第1回杉戸宿宿場まつりの開催

このように、杉戸宿めぐりを活用した観光客の誘致は、少しずつ広がりを見せてきましたが、「杉戸町」「杉戸宿」の認知度はまだまだ低く、「宿場めぐり」等に興味のある中高年層のみではなく、若年層にも認知・来訪してもらうため、平成27年12月6日(日)に杉戸宿開宿400年プレイベント「第1回杉戸宿宿場ま

つり」を開催し、町内外にPRを行いました。宿場まつりの実施にあたり、住民参加型のイベントとするため、町内業者や民間団体、一般公募者などから構成された検討・実施組織である「にぎわい部会」が平成27年7月に発足し、各々のアイデアや視察した祭りなどからヒントを得て企画を行い、部会員は当日のスタッフとしても活動しました。

宿場まつりでは、旧日光街道沿いを会



▶平成27年度実施した、第1回杉戸宿宿場まつり

場とし、商工物産の模擬店、フリーマーケット、ステージイベント、杉戸宿新グルメの金ゴマ入りたまふわミルクセーキの無料配布など、幅広い年齢層をターゲットとした試みを実施しました。

また、メインイベントとして、時代衣装を身に纏い、400年前の杉戸宿のにぎわいを連想させるような企画として「町人行列」を開催し、最後には杉戸宿開宿400年への思いを込め、来場者と399個の風船を空へ放ちました。

第1回杉戸宿開宿まつりは、来場者数12,000人と盛大に開催され、平成28年の本イベント「杉戸宿開宿400年宿場まつり」の開催も決定しました。

平成28年度の取組

杉戸宿開宿400年を契機とした取組は、開宿400年を迎える平成28年が集大成の年となりますが、主なソフト事業として10月30日(日)に開催を予定している「杉戸宿開宿400年宿場まつり」があります。

「杉戸宿開宿400年宿場まつり」では、当時の和装や甲冑など時代装束に身

をまとった方々による行列なども予定しており、昨年よりも規模を大きくして、実施したいと考えております。

杉戸宿開宿400年を契機に、町内外に広く「杉戸町」をPRするため、町・観光協会共同で作成した「るるぶ杉戸」やフリーペーパー「スギトゴト」を活用するとともに、ホームページやフェイスブック、ツイッターなどのSNSによる



▶ PR用に作成した「るるぶ杉戸」などのパンフレット

広報を進めます。

さらに、日光街道沿線の市町や東武鉄道とも連携し、PRを進めていきます。

その他にも、日光街道の埼玉県内にある、草加市、越谷市、春日部市、杉戸町、幸手市、旧栗橋町(久喜市)の六宿において、日光街道埼玉六宿連携スタンプラリーを、9月から12月に実施することを予定しております。

杉戸宿開宿400年への取組は、テレビや新聞など多くのメディアに取り上げられていますが、今後も、メディアを活用したPRにも力を入れ交流人口の増加につなげていきたいと考えております。

また、既存施設である流灯工房の1階を、観光案内所として活用し、町の観光や商工みやげ品等の紹介をおこなうとともに、町民の休憩や憩いの場としても活用していきます。

今後の課題と展望

これまでの取組は、杉戸宿案内人の実施する「宿場めぐり」を目的とした中高年層への認知度の向上や誘客には一定の効果がありますが、これを継続し、杉戸

町に経済循環の仕組みを作ることが今後の課題となります。

また、杉戸宿開宿400年プロジェクトの財源は、国の交付金や町の補助が大半を占めており、今後は財源・人員の自立も必要不可欠です。そのためには、プロジェクトの構成員等の理解はもちろん、ハード・ソフト両面で整備してきた資源を有効活用していく事が大切となってきています。

観光事業において「経済効果を生む」ためには、杉戸町に来てもらうきっかけを作り、「食」、「体験」、「宿泊」などの多角的なアプローチから、長時間滞在してもらう必要があります。

これまでの取組の中から、効果検証を行い、ターゲット層を明確にするなど、現状をしっかりと把握し、プロジェクトを進めていく事が大切です。

今後は、行政主体のプロジェクトとならぬよう、町民が主体となり盛り上げていく取組とすることが重要であると考えています。

杉戸町 商工観光課

(平成28年8月29日付第2971号)

▼サイクリング試走会には全国のサイクリストが隠岐の島町に集結

島根県

隠岐の島町

おきのしまちょう

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

ジオパークの島「隠岐の島町」

〜教育と観光事業による活性化をめざして〜

隠岐の島町の概況



隠岐の島町が位置する島後は、島根半島の北東約80kmの海上に位置し、隠岐諸島の中で最も大きな島です。島は、ほぼ円形に近い火山島で、隠岐の最高峰標高608mの大満寺山(だいまんじさん)を中心に500m級の山々が連なり、これに源を発する八尾川(やびがわ)、重栖川(おもすがわ)流域に比較的広い平野が開けています。周辺の海岸全域は、大山隠岐国立公園に指定され、雄大な海洋風景や

急峻な山並み等が風光明媚な景観を醸し出しています。

自然の良港を持つ隠岐は、日本海航路の中継地点として栄えました。江戸時代、西郷港は、蝦夷から上方までを結ぶ北前船の風待港として、多くの船で賑わいました。

明治初頭には、当時の島後の庄屋や神官が中心となり、隠岐騒動と呼ばれる島民の蜂起が起こりました。81日間という短い期間でしたが、松江藩の統治から独立し、住民による自治政府が樹立されました。

隠岐は、大陸の一部↓湖の底↓海底↓半島↓離島と、地球の動きによってその姿を何度も変えてきた場所で、大地の成り立ちをうかがい知ることができる地質資源や、世界的にも珍しい生態系を見ることが出来ます。島前3町村とともに「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」として、ダイナミックな景観と歴史を楽しむことができます。

高校の魅力化プロジェクト

隠岐高校は平成29年に105年目を迎えた歴史のある高校です。しかし、今から50年前の昭和47年には約670名もの

「グラチルターン」プロジェクト

この「グラチルターン」とは、県外に

生徒がいましたが、10年前の平成20年には約320名と生徒数が半減し、今年度は219名にまで減少している状況です。少子高齢化による自然減だけではなく、子育て世代の人口流出や、希望する進路を実現できる環境を求めて島外へ進学する生徒の数も大きく影響しています。今後さらに生徒数が減少し、学級減が進めば、教員数も減り、勉強や部活動などの生徒の教育環境が、著しく悪化するおそれがあります。

そこで、隠岐高校と隠岐の島町役場をはじめ関係団体が連携して高校の魅力増進と活力ある学校づくりを実現し、入学生の増加を目指すため、平成23年度に「隠岐高校魅力アッププロジェクト推進協議会」を立ち上げました。また、翌年度には県の事業である「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」にも取り組みました。

生徒募集を島内生徒だけではなく全国に広げ、平成27年には魅力化コーディネーターを配置するなど、島内外の生徒募集に力を入れ始めていた頃、隠岐の島町の「こども議会」において、町の中学生が町長に隠岐高校の生徒数増加を目的とした「グラチルターン」の提言を行いました。



▲孫と暮らす「グラチルターンプロジェクト」

住む隠岐在住者のお孫さんが隠岐高校に入学することによって、生徒数が増えるとともに、祖父母の様子を親に報告できるのではという提言でした。隠岐の島町教育委員会はすぐにこの提言を取り入れ、翌年には「グラチルターン」促進のために補助金を創設しました。対象は県外から隠岐の島町内の祖父母宅に居住、または隠岐高校清見寮に入寮した生徒で、住民票を隠岐の島町へ移せば毎月5,000円の補助を受けられるというものです。

そして、この制度の周知のためにチラシを作成し、新聞の折り込みに入れたり、県外に住む隠岐出身者の方たちには、東京・大阪・名古屋などにある隠岐出郷者の会などで配布したりしました。また地元ウェブ商店のダイレクトメールにも同封するほか、隠岐の島町主催で



▲樹齢800年の巨木「岩倉の乳房杉(ちちすぎ)」

平成26年9月に自然・歴史・文化などの魅力が認められユネスコの世界ジオパークに認定された本町であります。昭和の離島ブーム以来、観光客は減少傾向にあります。

島の外周はおよそ80kmと長大な距離があり、観光スポットや集落の多くは、外

ジオパーク認定 試される地域の力量

県外の方が多く参加するウルトラマラソンの前夜祭では、県外出身の生徒による「グラチルターン」の紹介をしています。

今後も、継続して隠岐の島にゆかりのある生徒の募集に力を入れていきたいと思っています。

また観光産業は、島における主要産業の一つである農林水産業との結びつきも弱いので、結果的に、産業として成り立ちにくく、職がない若者の流出を助長し、急激に高齢化を進めるとともに地域の活力をも失いつつあります。

島の自然・歴史・文化に世界レベルの価値があり、官民問わず観光関係団体も観光振興の取組を試行錯誤しているにもかかわらず、島の価値を生かした観光誘客が効果的にできていない現状のなかで、何かを仕掛け、誘客につなげる力量が本町には問われ続けています。



▲ロマンチックで奇跡の瞬間「ローソク島」

サイクリング事業の立ち上げ

観光地を結ぶ長大な道路は、国道・県道が多く、幅広で整備が行き届いています。過疎化が進む島であることも味方して交通量が少なく、信号機も少ない（港周辺以外には信号がない）状況です。

点在する観光地を結ぶ交通手段は今まで、タクシーやレンタカー、観光バスなどの自動車輸送が主でしたが、そのような過疎の賜物ともいえる本町の道路状況は、実は自転車通行に最適ではないかと考えました。

また観光産業の発展のためには、まち歩きによる滞在時間延長が観光客の消費促進に有効であることから、自転車で島ごとまち歩き（走り）してもらえば、疲



▲西郷港に浮かぶフェリーの前で



▲海岸線沿いの道路を疾走する自転車

弊が進む島内地域の振興につながるのではとも考えました。

そんな思いからサイクリング事業を立ち上げることになりました。

平成28年10月には、島の外周にコースを設定し、全国から参加者を募集してサイクリング試走会を開催しました。同年中に隠岐の島町としても本格的に事業を開始し、町独自のサイクリングパンフレットも発行しました。

そして平成29年には、サイクリング大会の企画やサイクルスタンド整備、サイクルリスト向けツアーの造成など、総合的なPRと受け入れ態勢の整備事業を行いました。



▲樹齢2000年とも言われる「神木八百杉」の前で

事業がもたらした成果と課題

事業実施の過程では、予定していた補助金の不採択、実行委員会の立ち上げの遅れ、商標権問題の発生や、島ならではの自転車フェリー輸送問題、コース設定・エイド食の調整など、初めての本格的サイクリング事業を一から構築するにあたり、困難な場面にぶつかることも多数ありました。

そうした2年間に亘る過程を経て、全国からサイクルリストを募集し、記念すべき第1回大会を平成29年10月に開催予定としていましたが、サイクルリストを島までお招きしておりながら台風接近により無念の中止となってしまいました。

大会の実施は叶いませんでしたが、一年を通してサイクルリストの受け入れを目的とした整備を進める中で、フェリー・ホテルへの自転車持ち込み、サイクルステーション整備、自転車コースの設定等

の受地整備や、全国のサイクリング愛好者へPRできたことは大きな成果となりました。

事業推進のための企画・開発を行い、関係機関（行政、船会社、旅行会社、サイクリング専門家、地元民間事業者）と実行委員会を組織して受地整備を進めるとともに、「サイクリングの島」のPR手段やシンボルとしての大会の開催に向けた準備が整ったことも大きな成果といえます。

また、世界ジオパーク・国立公園の魅力、食などの地域資源を組み合わせた企画・開発に努め、サイクルリストオフィシャルツアーも造成・催行し、島の存在と動線を明示することもできました。

しかし、一定の成果があったとはいえ、隠岐の島町のサイクリング誘客の取組は始まったばかりです。サイクルリストの受け入れに必要なレンタサイクル、ZING、電子マネー、輸送、宿泊、体験メニューの課題解決、食の整備や関係業者、住民参画の促進など、まだまだこれからの整備、課題は山積しています。

平成30年度には、今まで実施した事業の継続はもとより、スタンプラリーの開催、年間を通じたサイクルリスト向け旅行プランの販売などを計画しており、サイクルリストに楽しんでいただくための取組を地道に進めてまいります。

ジオパークの島「隠岐の島町」へ是非お越し下さい。

隠岐の島町長 池田高世偉

（平成30年2月12日付第3030号）

▼町を縦断する桜街道

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

花としじみの里 大任町



福岡県

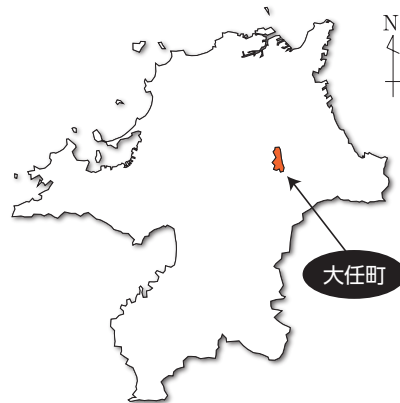
大任町

おおとうまち

大任町の概要

大任町は、福岡県の北部に位置する人口約5,300人の自然に囲まれた美しい町です。

町の中央を南北に遠賀川水系の彦山川が貫流し、周囲は丘陵地域となっています。かつては、良質な石炭の産地である筑豊炭田に属し、主要産業であった石炭産業により発展を遂げ、日本の近代化に貢献してきました。



殖にも取り組んでいます。

現在は、豊かな自然を活かして、町を挙げて「花いっぱい運動」を推進し、町を縦貫する「さくら街道」や「花公園」を整備し、四季に応じて色とりどりの花々が訪れる方たちの目を楽しませています。

さらに、平成22年10月にオープンした道の駅「おおとう桜街道」には年間約120万人が訪れ、商工・観光の中心としてのみならず、情報・文化の発信基地として町の賑わいに大きく貢献しています。

また、本町では「1個のしじみが、1日コップ一杯の水を浄化する」というしじみの浄化作用に着目し、彦山川の自然環境を守るために「大任町しじみ育成保護条例」を制定し、しじみの育成・保護に努めてまいりました。毎年10月にはしじみ祭りを開催。昭和62年から続くこの祭りは、今では彦山川の恒例行事として定着しています。近年では大任町の代名詞となったしじみを「おおとうブランド」とすることを目的として、しじみ養

▼親子ふれあい広場



西日本最大級の道の駅 「おおとう桜街道」

主要産業であった炭鉱の閉山後、大任町にはこれまでこれといった観光施設等は無く、旅行者から見れば、魅力の少ないただの通過点の小さな町に過ぎませんでした。

このような状況の中、大任町では、これまで進めてきた「花いっぱい」のまちづくり」をさらに推進するため、平成17年度から町を縦断する主要道路である大任中央線の沿線約6kmの区間に桜・紅葉・芝桜を植栽、「さくら街道」と名づけ、花いっぱいの町のシンボルとするとともに、大任町を通る交通量の増加を図りました。続く平成22年10月には、この「さくら街道」に隣接する町の中心地に、新鮮な地元の特産物が並ぶ直売所やフードコート、究極の癒しを追求した1億円トイレのある「もみじ館」と、大浴場を始め、広大な露天風呂や薬石浴など豊富な施設が揃う「天然温泉さくら館」、電動遊具を備えた「親子ふれあい広場」などの施設で構成された西日本最大級の道の駅「おおとう桜街道」をオープンさせまし



▲「天然温泉さくら館」露天風呂

た。

この道の駅「おおとう桜街道」は、これまで年間120万人を超える来場者を迎え、今では大任町を代表する人気観光スポットとなっており、また、「さ

また、「さ

個性溢れる

「おおとうブランド」

く「さくら街道」と「道の駅」周辺では、毎年春のおおとうマラソンや夏祭り、冬のイルミネーションなど四季を通じて様々なイベントを開催しており、観光のみならず、情報や文化の発信基地としての役割も果たしています。

さらには、平成27年にドッグランが新たに併設されたことにより、来場者が楽しめるレジャーの幅も広がり、ますます観光交流人口が増加しています。

大任町では、「大任町といえばコレ！」



▶おおとうマラソンポスター

▶豆腐・しじみ・納豆ポスター



といわれる特産品の開発と特産品フードビジネスの立ち上げを目的として、平成24年4月に特産品開発室（平成25年4月より特産品開発課）を設置し、新たな農作物や商品の開発に町をあげて取り組んでいます。

取組の第一弾として、平成24年にマンガーやライチなどの南国果実を栽培する「おおとう観光農園」を開設、平成26年に「糖度18度を誇る完熟マンゴー」「桜マンゴー」の開発に成功しました。道の駅で行われた初競りでは1個10万円の高値がつき、現在では、福岡市内の大手ホテルからも注文が入るなど広く注目を集めています。また、近隣自治体とのコラボ商

品の開発も行っており、これからの「おおとうブランド」の代表格として、まずは期待が高まっています。

続いて第二弾として、現在、大任町の代名詞となっている「しじみ」を「おおとうブランド」として定着させ市場流通を図るため、しじみ養殖場を建設し、おおとう産しじみの養殖に着手しました。このしじみ養殖については、全国的にこれまであまり取り組み事例がなく、難しいものとなりましたが、日々、失敗と成功を繰り返しながらも、しじみは少しずつ生育を重ねており、「おおとう産しじみ」の商品化も近いものとなっています。

第三弾は地元田川産の大豆（フクユタカ）を活用し、新たなフードビジネスを立ち上げるため、平成26年3月に「大任町納豆加工センター」を建設、平成27年

9月には国産材料にこだわった「おおとう桜街道とうふ」と「おおとう大ちゃん納豆」を開発し、試験販売を実施しました。

この2つの商品は現在、道の駅おおとう桜街道を始め、近隣の直売所等で販売していますが、消費者からの評判も良く、特に、タレにしじみエキスを使っている「おおとう大ちゃん納豆」は、納豆が苦手な方からも食べやすく美味しいと好評を得ています。これからの課題はさらなる生産量の増加と販路の拡大です。

また、これまで（有）ニンニク食品により、20年以上にわたり門外不出の技術を守り生産・販売されてきた、町を代表する特産品である健康補助食品「ニンニク球」が後継者不足などで存続が困難な状況となったため、国の地方創生加速化交付金等を活用し、平成28年5月に大任町と田川農業協同組合（JAたがわ）との共同出資による新会社「（株）おおとうニンニク食品」を設立しました。今回の事業では、「ニンニク球」の生産・販路拡大のみならず、にんにくを活用した新たな特産品の開発を始めとして、地域内の休耕田などの農地を有効活用し、にんにくの産地化を図るとともに、就農者の増加と

休耕田の解消を目指していきます。

未来に向けての子育て支援

進行する過疎化と若者の流出をくい止めるため、大任町では若い子育て世代のための環境づくりを進めています。まず町外の子育て世帯の流入を促す住環境の整備として、平成28年度より町営の子育て支援住宅の建設に着手しています。

あわせて安心して子どもを産み育てることができ環境を整備するために、医療支援の中学生までの拡充を実施するとともに、近隣大学と連携・協力し、無料の公的塾「おおとう未来塾」を運営する



▶おおとう未来塾風景

など子どもの基礎学力の底上げを図っています。

また、教育の機会均等の観点から大任町給付型奨学金制度を導入し、子どもたちが安心して就学することのできる環境づくりを行っています。

「ヤバイぜーおおとう町」

大任町では近年様々な事業を展開し、メディアに取り上げられる機会も増え、福岡県内外からの注目度も高まりつつあ

ります。しか

しながら、ま

だまだ知名度

は低く、県内

に住んでいて

も「大任町」

の読み方が分

からない人や

町の位置を知

らない人が多

い状況です。

現在、深刻

な過疎化に悩

まされている大任町にとって、町の知名

度を向上させ、町の様々な取組を県内外

の人々にPRすることは、まちづくりを推

進するうえで、他の自治体と同様に喫緊

の課題と捉えて取り組むことにしました。

そこで、「どのようにPRをすれば最

も効果的なのか？」ということに皆で議

論した結果、「ホームページやSNSな

どの情報ツールを充実させては？」とい

う意見もありましたが、「まずは誰でも

手軽に手に取ることができる観光パンフ

レットを新たに作成しよう」という結論

に至り、さらに他の自治体が作らないよ

うな斬新なデザインのものを作ることに

よって、その観光パンフレット自体を話

「ヤバイぜーおおとう町」ポスター



題性のある観光ツールの一つとして活用できないかと考えました。

作成にかかった期間はほぼ一年。パンフレットのテーマは全国の方に大任町を知ってもらうために、「とにかく斬新でインパクトのあるデザインとすること」「町の『変化』と『パワー』をイメージしたものにすること」「背伸びすることなく、等身大のものを作成すること」の3つに絞って、プロポザル方式による業者選定を行い、幾度も議論を交わしながら、大任町観光パンフレット「ヤバイぜーおおとう町」の完成に至りました。作成にあたって、デザインが斬新なため自治体の観光パンフレットとしては相

応しくないのではないかと、特にタイトルで使用している「ヤバイ」という言葉は行政刊行の冊子としては相応しくないのではないかと意見もありましたが、あくまで大任町を知ってもらうためには「行政がこんなパンフレットをつくるのか」と言われるような斬新なデザインが必要であり、町の「変化」をイメージするため、現在は若者の間で良い意味で使われるようになった「ヤバイ」という言葉がタイトルとして最適であるとして最終的なデザインを決定しました。

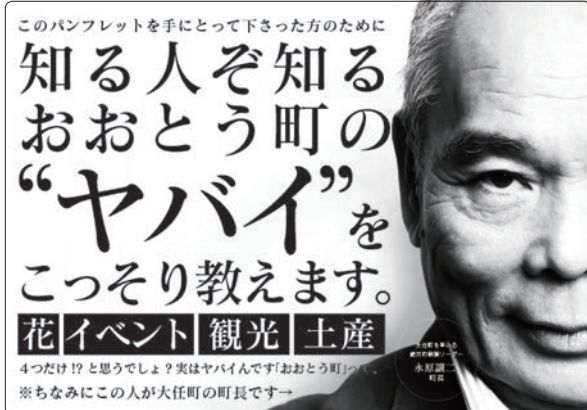
作成段階で苦労した点は、作り手の自己満足にならないように斬新すぎるひとつひとつのデザインを取りまとめ、見る側の人の事を考え、観光パンフレットとしての役割を損なわせないようにすることと、最初から構成を見直すことも何度ありました。

このような苦労の甲斐もあり、平成29年2月24日、「一財」地域活性化センター主催の第4回ふるさとパンフレット大賞では優秀賞を受賞したこともあり、現在では各地よりパンフレットに関する問い合わせも増加し、大任町の観光ツールの一つとして活躍しています。

大任町 産業経済課

(平成29年6月5日付第3002号)

第4回ふるさとパンフレット大賞で優秀賞を受賞



▼エメラルドグリーン街道

観光振興、体験型ツーリズム、イベント
(ご当地フェスタ)・環境・遺産(世界・日本)

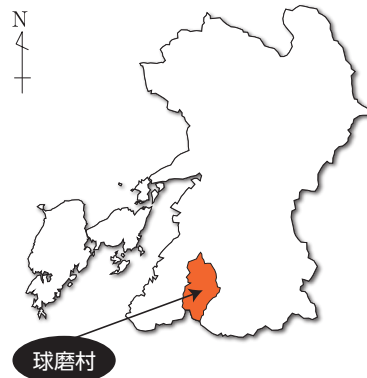
熊本県

球磨村

くまむら

球磨村の概要

球磨村は、九州の熊本県南部、人吉盆地の西側に位置する山村で、人吉市、球磨郡山江村、葦北郡芦北町、水俣市、八代市坂本町、さらに鹿児島県伊佐市に接しています。東西13km、南北25km、総面積207・58kmであり、そのうち約9割を山林が占めています。人口は3、925人、世帯数1、534戸(平成28年6月1日現在)で、40・1%を65歳以上の



▲ 2009年から復活した「SL人吉」

方が占めています。
年間平均気温は約15・0℃(気象庁ホームページより引用)、年間平均降水量は2、000mmを超え、夏期と冬期の寒暖の差が大きく、やや大陸的变化のある気候となっています。村の主な産業は農業と林業です。
球磨村は昭和29年に、渡村、神瀬村、一勝地村の3村が合併して誕生し、平成26年には合併60周年を迎えました。また、平成25年10月には、日本で最も美しい村連合へ加盟しています。
村の中央を日本三大急流の一つ、「球

一勝地、地に足をつけまず一勝を！
地名にこだわわるむらおこし



▲日本の棚田百選の1つ「松谷棚田」

磨川」が東西に流れており、川を挟んで南に国見山（969m）、北に白岩山（1,002m）をはじめとする標高700m級の山々がそびえ、これらの山岳を縫って無数の川が球磨川に注いでいます。この球磨川の水面は美しい花緑青に輝き、その色から並走する国道219号線には「エメラルドグリーン街道」の愛称がつけられています。また、球磨川沿いを国道と並行するように、S1人吉号で知られる肥薩線が走っています。

村域の大部分が山林であることから、農地もほとんどが山間部にあります。そのため、先人は知恵を絞って美しい棚田を築きあげてきました。日本の棚田百選に選定された棚田は熊本県内に11ありま

すが、そのうち「鬼ノ口棚田」と「松合棚田」の2つが球磨村にあります。

急流と鍾乳洞の里・くまむらの観光素材

球磨村の観光といえば、九州最大級のスケールを誇る大鍾乳洞・球泉洞や、日本三大急流の球磨川を下る九州で唯一のラフティングが有名です。

村の南側には石灰岩地帯が広がっており、観光鍾乳洞として有名な「球泉洞（きゅうせんどう）」の他にも、大小さまざまな鍾乳洞が見られます。例えば、間口45m、高さ17m、奥行70mで日本最大といわれる洞口を持つ国名勝神瀬の石灰洞窟（平成27年指定）や、球磨川に注ぐ権現の滝が美しい大瀬鍾乳洞などがあり、球磨川の大瀬地区付近ではサンゴ礁の化石も見ることができます。



▲九州最大級の鍾乳洞「球泉洞」の大石柱

特に「球泉洞」は昭和48年に発見された延長4・8kmの九州最大級の鍾乳洞で、3億年前前に海底にあった石灰岩層が、地殻変動により隆起し、地下水に浸食されてできたと考えられています。洞内は年間を通して気温16℃程に保たれ、夏の行楽シーズンには涼を求める観光客が多く訪れます。

また、暑い夏には、球磨川を満喫するため、多くのラフティング客が球磨村を訪れます。さらに、尺鮎（30cmクラス）の巨大鮎が育つことでも知られる球磨川では、毎年8月の最終土曜日に日本一の大鮎釣り選手権大会も開催されています。夏休みは年間で最も観光客が多いシーズンです。



▲日本三大急流「球磨川」のラフティング

このように、球磨村は川や石灰岩地帯の地形を生かしたいわゆるハード的なものがある。一方で、レジャー客の少

ない冬の時期に、多くの人が訪れるようになった場所があります。それが今回ご紹介する、縁起の良い地名として受験生に人気の場所「一勝地」です。

肥薩線 一勝地駅

一勝地の地名について、はっきりとした由来はわかりませんが、古くから「いっしょうち」と呼ばれていました。書き方は、地区に残る観音堂の鰐口（天文6年・1537年）の銘に「一升打庚申衆」とあり、「一升打」と書かれていたところがあるのは確実なようです。他にも、「二升内」「二升地」「二升打裏」「二所内」「二舛地」などが古文書等で確認できますが、明治維新後の市町村名見直しの際に、「一勝地」に統一されました。このとき、一升内よりも縁起が良いということで、現在の表記になったとも言われています。

明治41年、熊本県八代市から鹿児島県を結ぶため、鉄道が敷設されました。日露戦争の当時、ロシアからの艦砲射撃を避けるため、敷設が容易な海沿いではなくあえて、難しい山の中を通るルートが選ばれました。鉄道が敷設されたことで、この地にも「一勝地駅」が作られました。開通当時は鹿児島本線として重要な路線でしたが、九州西海岸を通るルート（現在の肥薩おれんじ鉄道の路線）が鹿児島本線として開通すると、昭和2年には肥薩線の所属となりました。昭和61



▲平成26年にリニューアルした一勝地駅入場券

年には、電子閉塞装置の導入、翌62年には国鉄が民営化され、8年ほど無人駅となった時期もありました。その後、地元農業協同組合JAくまへの委託を経て、平成17年から現在の村委託駅となり切符を販売しています。大正3年に作られた木造駅舎も、現役で使われています。

受験生が訪れる聖地として知名度を上げてきた一勝地ですが、そもその始まりは、昭和58年に、同駅の助役であった上村敏昭氏が、マイカーの普及等で列車の乗客や荷物の取り扱いが減少していくなか、なんとか利用率を上げようと考え縁起の良い「一勝地」の駅名に着目したことでした。そして甲子園出場を決めた熊本工業高校野球部に入場券を送り、それが話題となったのです。さらに上村氏は、「必勝合格」を图案化したスタンプや、受験合格の象徴「桜の花」をあし

必勝！合格祈願ノ旅

らった入場券入れも制作。「地に足をつけ 必ず一勝を」という名言も上村氏が発案されたそうです。

時を経て、入場券もリニューアルし、勝負事に縁起が良いお守り型になりました。ちなみに、この入場券には日付が入るのですが、購入日以外に、好きな日付も入れられます。受験や試合の日付など、特に必勝を祈願したい日付を入れる方が多くいらっしゃいます。

ところで、受験生とその家族が入場券を買い求めに一勝地駅を訪れるまでは順調でしたが、一つの問題が……。入場券は、JRの収入にはなりませんが、それだけで帰ってしまっただけの収入にはなりません。一勝地駅を訪れた方が、もっと周辺を巡り、地域の経済が循環するような仕組みづくりが必要です。

そこで、平成17年から村と観光協会は協議の末、必勝！合格祈願の旅キャンペーンを始めました。キャンペーン期間は受験が本格化し、なおかつ鍾乳洞やラフティングに訪れるレジャー客が減少する冬に設定しました。「必勝！合格祈願ノ旅」は一勝地界隈の名所をめぐる散策コースの企画です。

コースには、一勝地にある小さな史跡や地元の神社など、すでにある資源の中から「一勝地」とつく縁起物や、受験にうれしい健康祈願ポイントを入れ込みまし

た。予算をかけず、すでにあるものを掘り起こすという手法は、予算をかけて資源を作り上げるハード的な手法とは対照的な、ソフト的な手法といえるでしょう。

実際にできたコースをご紹介しますのでイメージしてみてください。まずは前述した一勝地駅をスタート地点として記念入場券を購入します。ぜひ、大正3年に建てられた木造駅舎もじっくり見ていただきたいところです。一勝地駅を出て県道15号線を球磨川の下流方面へ向かうと、赤い色の鉄橋が見えてきます。この鉄橋の下に、セキソの地蔵があります。このセキソの地蔵は子供の熱病や耳の病気に霊験があるといわれ、受験前の健康祈願のポイントです。鉄橋の下からS字カーブのところにあるのが洲田酒造本店です。ここは村で唯一の焼酎蔵で、「一勝

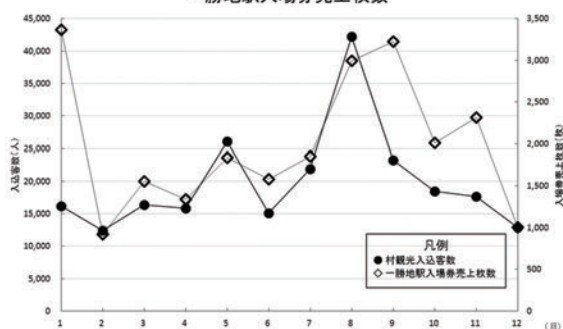


▲担当者が登場する必勝！合格祈願ノ旅 PR 写真

地」の名を冠した焼酎を醸造しています。その先には、「勝つ弁」を販売するさつき食堂と、その道の向かいに一勝地阿蘇神社があります。一勝地阿蘇神社では絵馬やお守りが販売され、受験シーズンには合格を祈願した受験生の絵馬がどんどん掛けられています。さらに、球磨川の支流・芋川を上流へ進み、ふれあい球里橋を渡ると、一勝茶屋があります。一勝茶屋では珍しい夏豆餡を詰めて勝の焼印を押した「勝万十」を食べることができます。そして、最後に一勝地温泉かわけみで温泉に入ってゴールです。

ゴールには物産館もあり、地元生産者による新鮮な野菜や手作りの加工品などが販売されています。コースの全長は1.5km程。徒歩でものんびり歩いて周

平成26年度の月別観光入込客数(球磨村)と一勝地駅入場券売上枚数



れる距離です。

さらに、平成20年にはこの取り組みの協力者である人吉駅長杉田憲氏のアイデアによって、JR肥薩線で使われる列車のすべり防止砂の活用を始めました。これが、現在も一勝地駅でプレゼントされている「砂び」です。すべり防止砂で試験に滑らない、砂び(咲いた)はサクサクの掛け言葉になっています。

これらの取り組みの成果により、一勝地駅入場券の売り上げは、取り組み以前の4600枚程から5年で2万枚まで伸び、以降は年間約2万枚で推移しています。

工夫を凝らして10年目

開始から10年以上経ち、すっかり球磨村の冬の風物詩となった「必勝!合格祈願ノ旅」ですが、予算をかけずに事業を継続していくには、やはりアイデアが重要です。

まず、開始当初の話ですが、実際に入場券を購入しに一勝地駅を訪れたのは保護者や先生のような大人の方が大半でした。せっかく球磨村に来ていただいたので、受験シーズンの雰囲気味わってもらうにはどうしたらよいか?そこで担当者考えたのが、一勝地駅での学生服の無料貸し出し。村の広報紙を利用して学生服の寄付を募ると、6着が集まり、さらにお隣人吉市の学生服販売店から11着の寄贈がありました。この学生服は今で

も貸し出しやPRのアイテムとして大切に受け継がれています。

次に、10年間同じことをしては飽きられてしまいますので、少しずつ内容の見直しも行っています。例えば、従来は12月が旅のスタートでしたが、平成26年には11月1日(いいひ)から3月5日(みなごうかく)にゴロを意識して期間を変更しました。それから、これまでは関係者だけで執り行っていた、入場券や学生服などの縁起物のお祓いをオープンイベントに位置付け、一般の方でも参加できるようにしました。

さらに、新たな取り組みとして、村の体験宿泊施設「田舎の体験交流館さんがうら」のスタッフが発案した、絵馬を自分たちで手作りして一勝地阿蘇神社へ奉納するイベントも行いました。

また、昨年開催した中学生向けのツ



▲必勝!合格祈願ノ旅ツアー

アーでは一勝寺での座禅体験を盛り込むなど、新たなアイデアも加え磨き上げながらさらなる旅の充実を模索中です。

住官民、それぞれの合格祈願

しかし、行政や観光協会の取り組みだけではこれまでの結果はなかったでしょう。受け入れ先である地域と協力して作り上げてきたからこそ結果です。

この事業を始めたころ、担当者は沿線のポイントの一つづつ何か合格祈願ならではのものができないか探して回りました。そうして生まれたのが、一勝地温泉かわせみの必勝御膳や、地元の加工グループあじさいの勝万十でした。

そして、この必勝!合格祈願ノ旅で重要な役割を果たしてきたのが、一勝地阿蘇神社の宮司・尾方嘉春さんです。尾方さんは、高校の教師をされていた経験もあり、受験生の祈願には一層力が入ること。祈願の際に受験生へ贈る言葉も、特に力がこもります。

春の季節になると美しいチューリップが駅前を彩ります。これは、地区の住民が自主的に手を挙げ、植栽したものです。観光案内所の職員ではなく、地域住民が管理も行っており、訪れる人を喜ばせています。

さらに、これらの取り組みもあって、JRからも受験シーズンは積極的に一勝地に声をかけてもらえるように。最近ではJRが企画した、人吉球磨地域の合格

祈願3社参りに一勝地阿蘇神社も一役買っています。ちなみに、あと2か所は国宝青井阿蘇神社と、受験の神様菅原道真を祀った十島菅原神社です。この3社参りで必勝・合格は間違いなしです。

飛躍をめざして

今後の課題も多くあります。入場券の売り上げは年間2万枚程であることは前述のとおりですが、ここ5年ほどは頭打ちの感があるのも事実です。今後、さらに一勝地を中心に球磨村を盛り上げていくためには、新たな仕掛けが必要と考えています。

また、今年の4月に熊本を襲った大地震。球磨村は幸いなことに大きな被害はありませんでした。しかし、観光産業は大打撃を受けています。毎年ゴールデンウィークには球磨川から聞こえるラフティングの歓声も、今年は全く聞こえませんでした。

だからこそ、今年は特に頑張り時です。もっと村をよくするために、地域住民と協力してアイデアを出し合い、今年の「必勝!合格祈願ノ旅」も注目されるような取り組みにしていきたいので、是非とも日本で最も美しい村「球磨村」にご期待ください!

球磨村企画振興課 高沢 絵利奈
(平成28年10月17日付第2977号)
※砂びは平成30年1月から諸般の事情により配布を中止しています。